

脳の情報処理機能からみた確認強迫のメカニズム

—強迫観念はどのようにして生じるか?—

鶴木恵子（著）（2013年3月，風間書房）

十文字学園理事・十文字学園女子大学特任教授，学術博士 内田 伸子

ストレスの高い昨今、強迫障害に苦しむ人が増えている。この障害に脳の情報処理機能の視点から、鮮やかにメスを入れた待望の一冊が出版された。本書の目的は、脳の情報処理機能という視点から、強迫性障害の新しい認知モデルを提案することである。本疾患の本質的な理解の在り様が、精神医療や心理臨床の現場でまさに変わろうとしている今、強迫性障害を対象とした実証的な研究を積み重ね、新しいモデルの提案は誠に意義深い。現代においては、感情や認知といった心の理解のために脳機能の理解は必須である。本書は、認知神経科学的な最新の知見を踏まえて脳の情報処理機能の観点から強迫障害の機序を解き明かしてみせる。

本書で展開される実証的研究の中心的なテーマは、「快・不快を誘発するような情動情報に対して、強迫性障害患者がどのように（意識が関与する“前”の段階も含め）外からの情報を認識し、感じとっているのか」ということである。特に注意バイアス、記憶バイアスに焦点を当てることで、新しい認知モデルの提案した点は画期的である。

本書の構成は、第1部「強迫性障害とは何か」では、現在、強迫性障害が医学的、心理学的にどこまで解明されているかを概観し、第2部「強迫性障害の認知過程に対する研究」では、先行研究

により、強迫性障害の認知過程が理論的にどこまで明らかになっているかを展望している。第3部「強迫における選択的処理バイアスの検証」は、強迫者（強迫傾向が臨床群とほぼ同レベルの非臨床者）や強迫性障害患者を対象として、閾下呈示・閾値近傍呈示条件を含めた情動ストループテストを実施した実証的研究の報告となっている。さらに特性だけでなく、責任感が高い時／低い時に、強迫性障害患者が脅威情報をどのように処理するかについて、ドットプローブ課題を用いて検証している。第4部「結論」では、本研究の成果を総合的に考察した上で、確認強迫の新しい認知モデルの提案を行い、将来に向けての課題と展望を示している。

近年、認知科学や脳科学の進展に伴い、臨床心理学の治療法や病態の理解が進んだとは言え、強迫性障害の治療率はまだ40～60%であり、その症状に苦しみ続ける人も多い。本書で得られた知見は、単に理論的な示唆に留まらず、その病理的苦痛の本質について理解を深める貴重な臨床的基礎資料となっている。新たな診断基準での診断と治療モデルの提案は、強迫性障害に対する心理療法、特に認知行動療法に関わる心理士の方々にとって待望の書であり、現代病ともいえる強迫性障害を克服するための福音となるに違いない。